

三重県護国神社奉賛会報

第八十二号

明治天皇御製 (明治三十七年)

国といふくにかがみとなるばかり
みがけますらを大和だましひ



御英霊遺徳顕彰祭

『学窓から戦場へ』の発刊によせて
英霊に感謝の誠を捧げましょう

奉賛会副会長 水谷 弘



会員の皆様、平素は色々のご尽力を賜り誠に有難く感謝申し上げます。

此の度、私事で僭越ではございますが、自著「学窓から戦場へ 航空無線通信士十四歳の出陣」を文芸社から出版いたしました。

終戦から六十七年の歳月が流れた。大東亜の戦争で戦った人達の大半は鬼籍にはいられた。

彼等を偲びつつ、六十九年前の記憶を辿り、若き学徒たちの出陣から従軍・終戦・武装解除、悲惨と屈従の捕虜生活、帰国までに落命した者、あるいは生還した彼等の気高き軍隊生活と国家に忠誠を尽くす人間の誠心を風化させないために後世に語り継ぎたく、歴史の一齣としての一念に燃えて体験を執筆した。

出陣時、昭和十九年(一九四四年)五月戦争は未期的な様相を呈し、国民は忍びよる食糧難と空襲に怯えながら暮らすことになる。若き学徒達は繰り上げ短期卒業となり、学業半ばにしてペン

を捨て銃を取り必勝を信じ、祖国に忠誠を誓い家族のため、愛する人のために祖国防衛の任務遂行に青春の情熱を傾注し、「義は山岳より重く」、「死は鴻毛より軽し」、「靖国神社で再会しよう」と肩を叩き握手をして学友達と離別し、異国の地に出陣した。

無線通信士の特技を生かした十四歳の少年期に航空通信士として中国大陸(上海・南京・濟南・天津・北京)と転戦した。終戦は北京郊外飛行場で遭遇し、武装解除された後、捕虜収容所に拘束されて銃口と向い合せの生活となる。

敗戦後は、戦死した友の遺骨を祖国に送還することが不能となり、各隊で管理し供養を続ける事となった。収容所内に簡易な祭壇を作り安置し、毎朝起床時と就寝前に、服装を整えて合掌し、英霊に哀悼の誠を捧げた。野外で一輪の花を見つけると懐に取めて持ち帰り、あり合せの花瓶にさして慰霊を続けた。

捕虜生活を終え帰国時には、「一緒に帰ろうね」と英霊に声を掛け、遺骨を肌身離さず一心同体で祖国の土を踏み締めた瞬間は、感無量で生涯忘れることはできない。

少年期(十四〜十六歳)の短い軍隊生活から多岐にわたり教えられた事は枚挙にいとまがないが、自己の限界に挑戦する精神力の涵養、家族の絆の大切さ、任務遂行の責任の重さ、温かい人間関係の樹立、窮地に立つ人間性、同胞愛、体力の温存と健康管理、愛国心等について軍隊生活で体験し学んだ事は、今でも忘れない。

申し添えますが、「戦争中の日本の若者は、軍国主義者たちに洗脳され、だまされて戦地に赴いたのだ。」というような論調があるが、それは間違いである。我々は、日本国のために忠誠心に燃えて青春の情熱を燃焼させたのです。志半ばにして散華した英霊に対し無礼千万である。

現在平和な生活を享受する人間として英霊に感謝の誠を捧げ、慰霊顕彰の諸行事に、靖国神社、護国神社、各市町村で実施する慰霊祭に積極的に参加されることを祈つてやまない。

彼等を慰霊することは、生きている人間としての義務であることを忘れてないでいただきたい。

水谷 弘(みずたに ひろむ)

大阪市生まれ

三重県護国神社奉賛会副会長

英霊にこたえる会三重県本部会長

偕行社三重県偕行会理事

郷友連盟三重県郷友会相談役

三重県隊友会員

学窓から戦場へ

航空無線通信士14歳の出陣

水谷 弘

Hirona Higuchi



若き学徒たちは、家族のため、愛する人のため、祖国防衛に青春の情熱を傾注し、互いに肩を叩き、握手をして、異国の地に出陣していった……。

文芸社セレクション 文芸社(定価 本体700円+税)

英霊の言乃葉

海軍少佐 古谷 眞二 命



東京都出身

海軍第十三期飛行科予備学生

大正十一年生

昭和二十年五月十一日没

満二十三歳

御両親はもとより小生が大なる武勇を為すより身体を毀傷せずして無事帰還の譽を担はんこと、朝な夕なに神仏に懇願すべくは之親子の情にして当然也。然し時局は総てを超越せる如く重大にして徒に一命を計らん事を望むを許されざる現状に在り。

大君に対し奉り忠義の誠を致さんことこそ、正にそれ孝なりと決し、すべて一身上の事を忘れ、後顧の憂なく干戈を執らんの覚悟なり

《解説》

古谷眞二中尉は昭和二十年五月十一日、「第八神風桜花特別攻撃隊神雷部隊攻撃隊」隊員として一式陸上攻撃機(桜花搭載)に搭乗、鹿屋基地を出撃、南西諸島洋上にて戦死。

作家の三島由紀夫をして「名文」と

言わしめたご遺言である。三島は自殺の一ヶ月前、広島県江田島町の海上自衛隊第一術科学校教育参考館で一通の遺書を読み、「すごい名文だ。命がかかっているのだからかなわない。俺は命をかけて書いていない」と言い、声を出して泣き出した、という。その遺書こそ、古谷中尉が慶大在学中、十八年九月の繰り上げ卒業を前に書いたものである。

【いざさらば我は

みくにの山桜より転載】

―平成二十四年度― 三重県護国神社奉賛会総会開催



三重県護国神社奉賛会総会

去る、平成二十四年十月二十六日の午後二時より拜殿に於いて「御英霊遺徳顕彰祭」を斎行。乙部会長の玉申拝礼に合わせ参加者全員で参拝。御英霊に感謝の誠を捧げた。

祭典終了後、南参集室に於いて総会を開催。会長の挨拶の後、岩本理事が議長となり議事が進められ、すべて原

案通り承認された。

平成二十四年度も会員各位のご指導ご鞭撻を賜りながら、会務を進めさせて頂き、皆さまと共に会員増加を期したいと思いますので宜しくお願ひ申し上げます。

《奉賛会入会のお願ひ》

奉賛会は護国神社の御英霊を恒久的に奉慰奉賛していく事を目的とし結成され、多くの方々よりご賛同を賜って参りましたが、会員数が年々減少しているのが現状です。

そこで、一般有志の方の入会を進め、会員の増加を図りたく、会員よりのご紹介を宜しくお願ひ申し上げます。

入会ご希望の方は直接神社へお越し頂くか、奉賛会事務局までお知らせ下さい。

三重県護国神社内 奉賛会事務局

TEL 〇五九―二二六―二五五九

《会費納入のお願ひ》

『平成二十四年度』(平成二十四年九月一日～翌年八月三十一日迄)の会費未納の方は会費の納入をお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年度会費 正会員 二千元

特別会員 一万円